

昭和二十六年四月十五日発行（毎月一回十五日発行）（通第二十五号）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈

光

第三卷・第四號

次

- | | | |
|-------------|------|------|
| 久遠の友 | 花田正夫 | (1) |
| 歎異抄第八・九章講話 | 福島政雄 | (4) |
| 無碍の一道 | 山下成一 | (7) |
| よろこぶ力なき故にこそ | 松村繁雄 | (9) |
| 信味點滴 | 蓬戸闇人 | (13) |

久

遠

の

友

花 田 正 夫

おなじ世に同じ佛のむねに生くる

久遠の友を恋ひてさすらふ

これは福島先生から頂いたお歌である。爾來私の胸に往来してやまぬ言葉は、久遠の友の一語である。私の青年時代に聞いた福田正夫氏の詩に「人生は淋しい、灰色だ、孤独だよ」といふ一節がある。當時感傷的な氣分も手伝つて深い感銘をうけたが、今日なほ意味は變るが、さうだとうなづかさされる。斯る人生的旅に久遠の友が得られたらどんなにか賑やかで嬉しいことであらうか。故人は「知己を千載の下におく」と言つた。たとひ千年、五百年のへだたりがあつても眞の知己を一人でも見出し得た人は幸福であらう。

扱て友達にも色々ある。曰く学友、政友、趣味の友、同郷の友、同業の友、同信の友等々と無数に存在し、共に語り、共に食ひ、共に樂しむとただちに友人と呼ぶが、久遠の友、眞の知己とはいはれない。それ等は皆、遠ざかれば疎んじてしまひ、離れれば忘れられて行く。よしんば遠ざからず離れず互に軒を並べて住んでゐても、お互に不完全な者同志のことでて、一寸した利害の喰ひ違ひや、感情の行き違ひがもとなつて互の情誼が冷えてしまふのが常だ。有形無形の利害

で相寄り、やがて不実で遠ざかるあぢきない実状である。恒常の友、久遠の知己！かうしたことはあり得べきことであらうか。だとひ非常な好條件に恵まれて、利害にも禍^{ワザハビ}されず、感情の齟齬^{ノゴ}がおこらないで深く永く水魚の交を續げ得たとしても、無常の嵐が吹き、死魔の襲ふところとなれば萬石の恨みをのんで別離の涙を流すほかなく、墓石も新しい間こそ花も捧け香も手向けるが、それも年と共に忘却されて行き、淡い物語となるばかりである。

煩惱具足の身をもつて、火宅無常の世界に住む者の常として「よろづのこと皆もつてそらごとたわごとまことあることなき」虚偽不実の域から一步も出られない、その必然の結果として、独生独死、独去独來がその定めである。

残るは唯一の親を思ひ浮べる。親はその膝元に居る時よりも離れて住むと一入懷しい。生前よりも死後に愈々親のまさらの念が深く身に沁み、更に自分が子を失ふとか病みおとろへる時、親を恋ひ慕ふ心は益々切実になつて行く。親の歳まで生きながらへた子の感想は無量なものがあらう。遠ざかれば疎んじ、離れれば忘れ行く世の常の法則に逆行して、遠ざかれば遠ざかる程、離れれば離れる程いや増しに慕はしいもの

み家と見、餓鬼は火と見ると訓へられてゐる。たとひ同じ家に住み同じく寝食を共にして居ても、心そのものは一人一人の境遇とか性格とかの影響をうけて夫々に異つた世界を持つ、恰も顔形が銘々に異なるのと同様である。これ住む境界の差である。世間でよく意氣投合したとか、意見が一致したとか言つて見ても、二直線が僅かに交錯したにすぎない、やがてまた別々に分れて行かねばならぬ。

それでは同じ境界に住むとはどうして可能なのであらうか「萬川海に注ぎて一味なり」といふ佛語がある。四姓の階級差別のきびしかつた印度において、尊きも卑しきも、佛弟子となり佛意にとろかされる時、一味に同入和合して、慢心も卑屈も洗ひ去られて行くことから出た言葉である。茲に萬川おののおのの長短清濁の別はあつても、流入すべき大海さへあれば海の力で自然に一味に転ぜしめられる。

法然親鸞両聖人にとって、その大海が念佛であつた。「同一に念佛して別の道なき故に、遠く通ずるに四海の内皆兄弟と爲すなり」との聖語もある。久遠の友、眞の同朋の誕生する場所である。ここを直指されて法然上人は「選択本願の念佛一つ」と仰せられ、親鸞聖人も亦「親鸞におきてはただ念佛して」と仰せられてゐる。そこに「さればただ一つなり」と同入和合の世界がひらけてゐる。私共がどんなに師よ師よとあがめ尊んで師の教にしたがひ師と同じ境界に立たうとしても、夫々に久遠劫來の宿業に縛られてゐる身とて不可能である。ただ念佛の大海上に帰することによつてのみ始めて俱会一所の

は親であらう。「ほろほろと鳴く山鳥の声きけば、父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」の行基菩薩の歌も、高野の山に詣でた芭蕉の「父母のしきりに恋し鶏の声」とある句も同じ心境であらう。然し互に顧恋し、恩愛思慕する心も親子一代のことである。これまた夢のうちのちぎりにすぎない、やがて松風に消されて行く。「人生は淋しい、灰色だ、孤独だよ」の詩人の声がまたしても思ひ浮んで来る。

斯る無人空^{ムジンコウ}廻^{カク}の沢に、切々として響き来る声がある。よき人の声である。

一人居てよろこばば二人と思ふべし

二人居てよろこばば三人と思ふべし

その一人は親鸞なり

聖人御臨末の御書と承はる。恩顔^{ヤク}は寂滅の煙と化し、徳音

は無常の風にへだたると雖も、切々として迫り、哀々として響き来る慈声であり悲心である。念佛の煙の絶えぬところ、そこに聖人が常に寄り添うて下さる。

又法然上人の御言葉にも「たとひ肩をならべ膝を交じへて住むとも、念佛のないところは千里萬里の隔たりがある。同一念佛のところには、千里萬里の隔たりも、百年千年の歳月も消えて常に同坐す」といふ意味のことがある。

惟ふに眞の知己、久遠の友とは、同じ境界に住む者同志に自然に交流する情懷である。同じ境界とは外形のことではない、心の境界である。佛教に「一水四見」といふ言葉がある。同じ水でも、天人は瑠璃^{ルリ}の大地と見、人間は水と見、魚は住

道がひらける。

扱て「念佛」とはどういふことであらうか。読んで字の如く、佛を念ずることである。南無阿彌陀佛と申すことである。

阿彌陀佛に帰依し奉ることである。阿彌陀佛とは御生命の極みのましまさず御光明のはてしのましまさぬ佛であります。

無量寿如来、無碍光佛であります。帰依するとはたのむことである、とろけ合ふことである。

然し我々は阿彌陀佛をどうしてたのみ、帰依し奉ることが出来るのであらうか。一番大切な問題はここにある。顧みるに我等には相対五分五分の心しかない、絶対の心は絶無である。

事毎に起伏してやまぬ思ひは泡のやうなところである、日夜流來流去してやまぬおもひも暴流の如く千変萬化してやまぬ。かかるはかない心で信じたとかわかつたとか言つて見ても又消えて行くのがその定めである。

私はかつて身の程をも知らず佛に近づき佛をしつかりと信じようと企てたことがある。然しどんなにあせつて見ても、どんなにもがいて見ても、自分の手で掴まへたものは自分の手掌より大きいものではない。まして佛陀の無限の慈悲、無辺の智慧を得られやうはづはない。それどころか自分自身の近辺の人に対してさへ常に人としてのあつかひをしてゐない。

唯火鉢同様なあつかひしか出来ない、火鉢は冬は調法だが夏は邪魔である。人も自分に都合のよい時は有り難いが、反対の時は邪魔である。して見れば人の眞の姿さへ見得ない私にどうして佛の眞相を拜し帰依することが出来やうか。自分で

身が盲であるくせに色の白黒がどうして見分けられやう。自分自身が塞の身でありながらどうして眞なるものに近づき得やうか。

鏡に向ふとき自分自身の姿が写る。法に照らされて先づおほろ氣に自分の盲で塞の身であることを知らされて絶望より外なかつた。その時である、私の耳もとに寄りそつて叫ばれる声がした。それは親鸞聖人であつた。「花田お前も盲なから親鸞ち愚者である。花田お前も塞の身が親鸞ち行足のかけた身である」と。私は驚いて聖人の御声に耳を澄ませた。するとまた法然上人が告げられる「法然も愚痴の身、十惡の法然房である。白黒のけじめもつかぬ童である、一文不知の愚者である」と。

私はどんなに驚ろき、且つ有り難かつたことか。私如き盲で塞の身には誰一人として優しく声をかけて下さる人はない。と信じてゐたからである。世界中何処を探して見ても、健脚の者、鋭眼の士は人々から賞讃され、それに反する者は皆捨てられて行く。それがきびしい地上の鉄則である。然るにこの鉄則を破つて、盲であり塞である私を微塵も責め給はずして、私の心中に飛びこんで私に同じて下さる慈心である。病者は病者の身になつて下さる看護者の心にのみ温められる。私と兩聖人とのつながりはここに結ばれ始めたのであつた。

然も兩聖人は語をついで「かかる盲塞者のために阿彌陀佛があらはれて下されたのだ。南無阿彌陀佛をとどけて下されたのだ」と異口同音に仰せ下された。盲塞者の私の心底に飛

護り離し給はぬのである。

釈迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

我等が無上の信心を

発起せしめたまなり

信じ得ず行じ得ぬ盲塞者の故に、ひとへに本願他力があらはれて下され、信ぜしめ行ぜしめて淨土に迎へとつて下さるのである。

扱て御恵み下さる念佛の中に私に久遠の友の姿が見出されて来た。業縁次第に住むところは異なり、住む時は変つても、時間と空間を越えて同一光明界裡に永劫の御縁を感知せられる。觀音勢至の二菩薩は常に念佛の行者の親友となつて下さると聞くが、孤影悄然たる沙漠の人生に、はた淨土に散在されて、よき友よき師となつて下され、私を励まし、私を迎へ、私を育くみ、私を護つて下さる。

歎異抄 第八・九章 講話 (一)

福

島

政

雄

今晚は歎異抄の八・九両章にかけて申し述べて見たいと思ひます。近角先生からよく伺つて居りました頃に、歎異抄の中には处处に名所と言ふべきものがある。譬へば第二條の如きは最も歎異抄の中の名所だし、それから第三章の「善人な

名所の中の名所と言ふべき処であります。

第八章

念佛は行者のために非行非善なり。わが計にて行するに非ざれば非行といふ。わが計にてつくる善に非ざれば非善といふ。ひとへに他力にして、自力を離れたる故に、行者のためには非行非善なりと、云々。

八章の方は一寸読みましただけでは何となく、すぐピンと来ないと言ふやうな感じがする。然し非常に大事な処であります。

「念佛は行者のために非行非善なり。」行者の行にあらず、行者の善にあらず、と言ふのは、佛陀の大いなる行であり佛陀の大いなる善である。この佛陀の大行大善を我々に廻向せられる、賜はるのであると言ふことであつて、行者のためには行にあらず、善に非ずであります。

それで私は親鸞聖人の信仰の上で行と言ふことについて前からかう言ふ感じを持つて居ります。つまり親鸞聖人の信仰では、ある特殊な「行」といふものはない。我々が行する特殊の行といふものは無いが、然し念佛は我々の全生活の一言行といふものの上に響いてくるのでありますからして、むしろこの「行」といふことを言ひますなら、私共の生活のあらゆるもの、生活の上で行ふと行ふこと総てはそこに念佛が響いてくるといふ意味において「行」といふ意味をもらいます。それでありますからして淨土真宗の信仰の上においては、

我であつて、自分に殊勝の行といふものがある筈のものではないといふことが信仰の極致であります。

私共の現実の毎日毎日の暮しといふものは、どんなに徹底的にやつていつも存外ひつかかりが多い。然しひつかかりが多いにつけても結局念佛はかういふ自分のために「行に非ず、善に非ず」と落着いてくるのは念佛に融かされるのである。佛陀の誠が自分に徹して、そのひつかかつてこだはつて居る心持ちといふものが融かされるのである。かういふ関係でありますからして之が味はれてくるといふのはそんなに頭で考へたやうにうまくいかんのであります。始終ひつかかりながら結局此處に徹する。徹するのはこちらから徹するのではなくて向うから徹して下さるといふ意味において徹するのであります。

第八條の味はひといふのは簡単に申せば、さういふことになるかと思ふのであります。「ひとへに他力にして、自力を離れたるゆへに」ひとへに他力といふその味は、我々が自分の力と思つてゐるそのものも如來の他力にはぐくまれてゐる、或は如來の御催しであつたものを、それを自分と自分の力でやつてるやうに、妄想をしてくるのが我々の現実の状態である。本当のところにふり返つて見れば、ひとへに他力である。ひとへに他力といふのは如來の他力と言ひ換へていいと思ふのであります。つまり如來の他力といふのは自力を包みする他力であつて、自力と対立する他力ではない。だから私共の

「行」といふことを言ふならば銘々の全生活が「行」になる。特別に取つておきの「行」はない。全生活が「行」といふ意味は全生活の上に念佛といふことが響いてくる。全生活の上に佛陀の智慧と慈悲とが及んでくる。私共の全生活といふものは、あらゆる「煩惱行」であります。煩惱にあらざるものには、一つもないといふやうなことになりますが、その煩惱のかたまりといふやうな私共の全生活の底の底まで佛陀の誠といふものが響いて透つてくる、その佛陀の誠が響いてくる透つてくるといふ意味において、私共の一言一行と雖もそれがために非行非善なり」といふ御言葉が味はれてまゐります。

唯然私共の現実といふものは存外自分の力といふものを思はずには居られんものでありますて、何か行つても、それが善い事を行つたといふやうな風に思ひますと、自分だつてこれ位善い事が出来るといふ心持にすぐなれば、其処にこだはりが心持の上に出来てまゐります。そのこだはりをあくまでもたたき碎いて、とかしてしまつて、そして又自分は自分の善なる行ひといふやうな事にひつかかつてゐるのだといふ処に氣が付いて参るやうになるのは、佛陀の「大行」が私共に透るのであります。だから理想的に言へば、自分の一言一行の上に自分としての誇りといふものは微塵もないのが所謂無

現実の生活では自分の力でやつてゐるといふやうな自覚なり意識なりがなかなか離れないのです。それはなれなり、その自分の力でやつてゐると思つてゐるままが、如來の他力の御催しで、その呻みによつて、自分の力と思ふものが働いてゐるにすぎない。そういう絶対他力の味はひといふものを念佛の上でふり返らせさせていただく、かういふのであります。だから私共の自力の根性といふものが即坐になくなつて了ふといふのでなくして、自力の根性といふものが次から次へと現れて来ますが、その現れて来る自力根性全体を包みする他力である。我々が自分の力と思つて居りますものも、実は他力であつた、本願力であつた、佛陀の働き唯一つであつた。それを自分の力であるやうに思つてゐるにすぎない。子供が御客様の前に自分でお膳を運んで行くといつてお膳を持つてくる。さうすると母親が子供が若しひつくりかへしてはいけないといふので後からソート手をそへてやつてくる。子供は母親に手をそへられて安全にやつてくるといふことには氣がつかないで、自分の力でお膳を運んだと思つてゐる。何時も後の方から母親の力といふものが全体を保つてゐる。さういふふうのことであつて、自分では自力と思つてゐるけれどもふり返つてみれば全体が他力であつた。絶対であつて、他力対自力ではない、自力を包みする他力である。かうした御心持ちかと思ひます。

無碍の一道

念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし、罪惡も業報を感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故なりと、云云。

と道破されてあります、この金句を拜見しますと、念佛者は人であり、一道は道であり法であり、人と法とを同一視されてゐる祖聖の御眞意がうかがひ難いやうであります。然しこの矛盾に見へる表現そのものが、實に切実に又簡明に如来廻向の眞信を全身心を以て感戴し給ひつゝある信の妙境を道破されたるものと戴けるのであります。抑も佛法僧の三宝がその名は異つてゐますが、その底に流れる一如の妙消息よりうかがへば三宝一体であります。ここに念佛者は眞に念佛そのものであり、直ちに何ものも障碍することなき一道そのものであると信嘗して下された所以でありますか。

になつて、凡愚を限りなく悲愍し給ふ不滅の眞実が直ちに凡愚の迷心に滲みこみ来つたとき、我等にも念佛三昧を惠まれることは全く感應道交のためであります。換言すればこの金

かくて天神地祇ももう世話のいなくなつた自らの清閑を如何によるこばれてることでせうか。敬伏の伏の一字こそ眞に天神地祇が念佛者を絶讚されつゝある感情を示すに適切な文字であります。

次に魔界ですか。これは人間の目に見えませんが人間の弱點に乘じて人間をだまして邪道に追ひ込み、その悪果に苦しむ姿を見て喜ぶ極悪性の部類であつて、然も外面に恐ろしい相を現ぜず、むしろ柔軟な顔をして人間に近づき之を邪道に誘惑するのであります。聖人は此世に魔界のあることを否定されないのであります、すでに念佛者に於いてはそのあらゆる弱味そのものを見抜きてあくまで悲愍し給ふ大悲心を頂きつつある上は、弱味はあれども無き分にならせて頂いてゐるのであつて、魔界が念佛者に近づいてもその弱味につけ込む余地なきが故に、鉢を收めて忽ち退散するのであります。

次に外道とは佛教以外の宗教、哲学、思想等を佛教の立場から指す言葉で、佛教を内道として、他を外道と称し、佛晝を内典と言ひ他を外典として区別してゐるのであつて、之を頭から異端邪説として排斥する意味ではありません。然しそれが佛教と異なる処は涅槃を取り扱はぬ点であります。信仰の妙味から窺へば人間の眞実の幸福は佛界涅槃の境に即入し

山下成

1

句は実に限りなき大悲心に安住して生死即涅槃と証知し又煩惱を断せずして涅槃分を得る大慶喜を讃へ給ひし御言葉ではないでせうか。

なれの果は、いやでも地獄に落つる外なき悲惨な宿業に泣く
迷妄の凡夫を、その故に一刻も捨ておけない、是非とも救は
ねばと忍終不悔の大精進を以て寸時の御休息なく、叫ばせ給
ふ大眞実を承りては、言亡慮絶、イヤハヤ萬事を佛前に投下
し泣血感謝し奉る外ありません。かくて生死流転そのままに
生死流転を超え、世と争はず世と妥協せず、世に迎合せず、
世に汚されず、生きてよし、死んでよし、地獄へでも極樂へ
歩ませて頂きうる稀有の大幸福を恵まるることこそ、誠に天
地の一大不思議であります。

かくて天神地祇がかかる無碍の一道を歩む信心の行者を見られて、その威徳のすぐれてゐるに驚き、首を垂れて敬伏されことになるのであります。念佛者それ自身が涅槃分に安んずる以上最早これを守護する必要もない、よくもこれ程迄の妙境界に到れるものかなと絶讚されてゐるのであります。

眞に無碍の一道を実現する事に外なりません。なぜなればそこにのみ眞の自由、平等、清淨、寂滅の微妙な消息を心解説味する事になるからであります。外道ではかかる妙境界を掲ぐるに到らずして多くは功利心に始終し、又実現性の乏しい高い理想を概念的に遊戯してゐるに過ぎないと申すべきであります。まして、終に生死即涅槃の妙境界に通入せしむるに堪えないのであつて見れば、内道の尊さに及ばぬのであります。然しそれを求道途上の心理に反省しますれば、如来廻向の他方の大道以外の萬善諸行の小路に執着し、いつまでも定散自力の聚縛から離れるに由なく、首を垂れて如來の前に哀願しつゝも、いつまでもその眞實義に触合出来ないのは全く一種の外道に障礙せられてゐる実状であります。此の爲に數十年の聴聞も、今なほ如來の大善大功德を信受し難い事になつてゐるのであります。かくも定散の外道が自己心内に喰ひ入つていつまでも如來の大悲雷に聾となつてゐることは誠に痛ましいことであります。然し宿善開發の一剎那、豁然として如來の大悲心に融化せられまつりて見れば、始めて自己自身が相対有限な定散自力の外道そのものであつた事を覺知せしめられて始めてその障礙から解放されるのであります。

心内の外道ここに滅び、他力の眞信充満せる一道の行者になつて見れば、今や如何なる外道も一指も加ふる違もない事に転ずるのであります。又反対に他の教の教學、思想を味読しつつ劫つて之を以て我が信を深める好材料に転じうる幸運をも自ら附與されることをいよいよ慶喜するのであります。

次に「罪惡も業報を感じることあたはず、諸善も及ぶことなき故に云々」とは、実に人間が罪惡を所有するのでなく、人間そのものが罪惡であり煩惱であり業報であり、飽迄も六道を流転し迷より迷に入る外ない。この愚惡人をこそ却ていよいよその故に見捨てられない。悪人なればこそ何はさておき救はねばならぬと、飽までも悲愍して下さる如來大悲の本願一つに安住させて頂けば、今や罪業に対する一切の責任が解放せられて、いよいよ限りなき大悲一つに生きぬかせて頂き得る幸慶を惠まれるのでありますから「罪惡も業報も無分」

よろこぶ力の無き故にこそ

松村繁雄

私は、或る時一青年から次のやうな質問を受けました。「今まで宗教はアヘンだと思つて居りましたが、静かにお話を聞いて見ると、佛様といふ事は『お慈悲』といふ事で「なるほどさうだな」とは分ります。ところが、人から一円の飴玉を貰つても「有り難う」と思ふのに、佛様のお慈悲は聞いても一向に有り難くならないのですが、なぜでせう?」と、

之は一見平凡な質問のやうでありますけれど、実は、是こそ萬人の胸に等しく潜んでゐる疑問であり、世のマザメナ方

よりも野糞が好き、犬に小判を與へても有り難いとは言ひませぬ、言はぬどころか見向かうともしないでせう。私共は、口にはお慈悲お慈悲と申しますけれど、アノ犬のやうにお慈悲よりも金が好き、樂が好き、勝つ事が好き、威張る事が好き、他人を見下せる事が好き……等々の、たゞ取りたい得たいばかりに心の全部が固まつてゐるのです。

犬が野糞を探すのは犬の本能であつて、野糞を看に持ち替へても犬はどこまでも犬であり、たゞ、むさぼつてゐるのが犬の本能であるのです。私共が欲しがりむさぼつてゐる金も、樂も、意地も名譽も、私の深い煩惱の本能であつて、それを知識の上で、道徳の上で、如何に理屈をつけて見ても、結局は我身を飾らうための我慢でしかあり得ず、どこどこまでもたゞ得やう取らうの煩惱の本能であるのです。犬は看にありつくとよろこんでペロリとそれを食べはするが、そこをお慈悲とも親切とも考へ得ず、たゞいつまでも、欲しい欲しいと要求する。私共は、金が欲しい名が欲しい、樂が欲しいと数限りもなく、犬のやうに看を欲しがつてゐるけれども、それがなかなか充たされない。金が得られても名譽で失望し、名譽を得やうとすれば金で不足を思ふ。名に金にや、満足が出来るとすれば今度は思はぬ不幸が襲ふし、若し又幸ひに、今日は不幸からまぬがれてゐるとしても、やがては泡のやうに消えて去る火宅無常のおのが身が何とのう心細く思はれて心の底が充たされない。そこで、どうかしてすつほりと安心の出來る完全な看は無いものか、と、遂にそれをお慈悲に信

に転じて下さるので、終にこれを感じつ直に感じないことになるのであります。又限りなき大悲の眞実、諸善も及ぶことなき大善の念佛に満足してゐる以上は、他の小善福德を求むる余地が毫末もない事になつてゐるのであります。
かくて祖聖の御一生に於いての波瀾重疊の業報をものともし給はず「唯念佛して」念佛無碍の一途に逍遙せられて、茲に一切善惡の衆生の悉く救はるべき大道を身を以て開示されたことは、聖人御自身が直に無碍の一途であらせられし事と拜察するのであります。

々が必ず行き当る最終の質問であるのです。即、熱心に道を求むれば求むる程、「お慈悲の話は分るがどうもよろこべぬ」といふことになるか、或は、自分は信仰は得てゐると思ひながらち不慮の災厄に会つたり家庭や社会の不和にぶつつかつたりすると、内心ひそかに、「どうもお慈悲がよろこべぬ」「これでは駄目」と、苦慮するに至るのは皆ここに問題があるからです。

なぜ、お慈悲がよろこべぬのか。それは私共が煩惱具足の塊であるからです。例へばアノ犬をごらんなさい。犬は小判仰に求めるに至る。

ところが犬が野糞には満足しても小判には関心さへ持ち得ないやうに、煩惱具足の塊の私は野糞程の価値しかない我慾我情の満足にのみ心とられて、お慈悲の小判はどうしても受け取れ得ない。さうして、犬が時に野糞にありつき看にありつゝと満足して暫時安心して日向ぼっこをするやうに、私共も、不充分ながら金や名譽にどうやら気が休まり、時たまよろこびらしいもの、お慈悲らしいものを摑むと、ついそこを握つてうかうかと其日を立てるが、時に不如意な事に行き当ると又心淋しくなつてお慈悲をあさりよろこびをつかまへやうとする。丁度、犬が空腹を感すると日向ぼっこから起きて又野糞を探し廻るやうに、さうして、犬がどこかで野糞にありつくと又たちまちに眠つてしまふやうに、私共も、何か己れの好きなものを握ると、たちまちに「我得たり顔」になつて再びうつかり眠つてしまふ。斯くの如くして、得てもすぐ崩れ、崩れると又探し廻つて何かを摑み、求め探して一生を遂に棒に振るのが私共の姿ではありませんか。

嗚呼、犬は犬と知らずに、人は煩惱の塊りと知らずに……けれども、知り得ないのが当り前ではないか。犬に、犬の姿が分らう筈がなく、煩惱の私に、煩惱の姿が分らう筈がないではないか。然るに、私共は今おほ氣ながら「煩惱具足」に氣付かして貰ふ。是は一体どういふ事か?。犬が「大だな」と自らの姿に氣がついたとしたらそれはまことに不思議な現象であるやうに、煩惱具足の塊りの私が、煩惱具足を考へる。

と云ふことは將に一大不思議であるではないか。何がさうさせたか?是は之、寛に佛智の不思議でなければならぬではないか。

氣がついたとしても、犬の自性が変へられるものでないやうに、私が今煩惱具足に氣がついても煩惱の自性が少しでも変わるべきものでない。然るに、私共はすぐ錯覚を起して、「煩惱が煩惱と分つたら少しは煩惱が減らされるだらう」と思ふ。若し夫、犬が少しでもその自性を改められるのなら、それは既に犬ではない事になり、私の煩惱が私の力で少しでもスリ減らされるとしたら、私は煩惱具足の塊りでは無い事にならうが、煩惱具足の塊りである私は、悲しい事には、私の煩惱を一分一厘もどうする事も出来ないではないか。それなのに、又しても又しても錯覚を起して「お慈悲を聞いたら少しはよろこべさうなもの」と思ひ「煩惱が減らないやうではお慈悲があつても駄目ではないか」とさへ思ひ惑ふ。それはなぜか？それが煩惱具足の塊であるからではないか。煩惱を煩惱と覺り得ず、「煩惱はスリ減らされるもの」と心底深く錯覚して、然ちそれが錯覚であるとも覺り得ない程、深い錯覚に陥つてゐる煩惱具足の私ではないか。こゝはまことによく氣をつけて貰はねばなりません。

アメ玉に一円ほどのお札を申してゐるに過ぎまい。でも「お札を言はねばならぬ」といふ道徳心を持つてゐるではないか？と考へる人もあるらうが、「お札を言はねばならぬ」と思ふのは、我身を「道徳」といふもので飾らうとするためで、相手の親切に深甚の感謝を捧げてゐるのではないではないか。それで、ありながらも又すぐに「お札を申してゐる」と自認して——、自ら自らを評価して——それを以つて相手に対するお札と思ひ、そこでも又大なる錯覚に陥る。然も、それほど、五歩五歩の、相対的の、御恩知らずと今知らされながら、その非が——間違ひがどうしても改められない。さういふ錯覚と今ありありと氣がついても、尙も「御恩は知り得るもの」と、果てしもなく錯覚をつゝけて「お慈悲を聞いてよろこびたい」と思ひ詰め、いつまでも思ひ惑ふ煩惱具足の私であるではないか。

入れやうとする事であり、「よろこべた」と思ふのはアメ玉を手に入れたと思ふ事であり、「よろこべぬ」と歎くことはアメ玉が取れぬ取れぬと歎く事であり、何れも何れも、カノ野糞を追うて果てしなく放浪する犬のやうに、親心は見る事が出来ずしてたゞ己れの煩惱具足にさいなまれてゐる錯覚であるではないか。

る御眞実、その御眞実を享けて、茲におほろ氣ながらも煩惱
具足の私の姿を知らしていたゞく、何たる不思議ぞ、何たる
お札を申してゐるごとく見えるが、何ぞ知らんそれは一円の
よろこびぞ。

かくて仰れば、二人皆盲のまゝが佛智の慈光に包まれて是
惱の有情が、明らかに久遠の癡心に抱かれて居り、將に無明
果業の苦因を切られてゐるではないか。

自力叶はで流転するより外に途の無い私が、今は丸々と佛力に護られて居り、かくて佛力に誘はれて歩む身は、煩惱は煩惱のまゝに照し出されて、そこにはモ早錯覚もなく、暗いと思つた人生がまことに明るく、夢と思つた人生が將に久遠の光に生かされてゐるではないか、嗚呼何をか言はんや、たゞほれほれと大悲の御名を唱へさせていたゞくのみ。

南無阿彌陀佛

聖なる語

人間の恩愛を譬ふれば、衆鳥が一夜を大樹の梢に明すやうなものである。親族の契りも僅かに短い一夜である、明くれば各別れ飛んで、定めの禍福に従はねばならぬ。

日に焼かれ 寒さに凍え 恐れの森に 只一人。衣なく
火もなくて 目的に立てる 犬尾は坐せり

「耳ある人の聞いて信を開くやう
この不死の門は彼等に開かれたり」

信

味

點

滴

蓬

戶

閑

人

子供に小遣を與へ過ぎると無駄使ひを覚える、與へ足らないと小供はひがむ。必要なだけ正しく與へることが大切である。

子供に必要な程度を見抜くのが親の正しい智慧である。見抜いた限りそれをどんなに苦労しても満して下さるのが親の慈悲である。

佛は我等凡夫のありのまんまの正しい姿をかねて御見抜き下されて、ただ念佛一つの慈悲を何処までもとどけて下さる。これ佛陀の御智慧と御慈悲の至極である。そこに愚かに貧しき者もひがまず、智あり富ある者もおらず、念佛成佛せしめて下さる。

○ 我等が言ふ善惡は自己中心である。自分に都合がよいと善、都合が悪いと惡となる。渴水期に雨が降ると黄金の雨といひ梅雨期に降り続くとまたかと顔をしかめる。

佛教での善とは佛果に近づくことで、それをさまたげる事が悪である。蓮如上人は「萬事信なきが惡きなり」と惡の最大なるものを信なきこと、仰せられてゐる。凡夫として自らの力で成佛するなどとは絶えて不可能であるから、たゞ信れてゐる。煩惱に狂ひ惑ひ行き詰つた者も、賢者に遭ひ、賢者の慈顏愛語に触ると、心のモヤモヤが雲散霧消せられて、くつろいだやうらかさが自然に與へられる。その故にこそ慈悲を西方に垂れ、應化身を地上にあらはされ一路淨土に引接せしめてやみ給はぬ佛陀まします。

○ 我等凡夫の善惡沙汰は地獄圖繪である。自の傷つき他をさないなんやまぬ。我等凡夫の貪欲沙汰は餓鬼の姿である。飽くことを知らず無限にさ迷うて行く。その故にこそ慈悲を西方に垂れ、應化身を地上にあらはされ一路淨土に引接せしめてやみ給はぬ佛陀まします。

○ 高等学校時代に池山先生に教をうけた。その悠然として迫らぬ態度と世間一般の善惡をこえた指導に深く感銘した私は、「先生はまことに人格者である。今迄に先生の様な人に遭つたことがない」と申すと先生は莞爾として微笑せられながら「人格者と呼ばれる人は大抵無能無力者の渾名の場合が多い、さういふ意味では私もその一人であるが、若しさうでないとしたら大きな間違ひである。私は三文の価値もない全く駄目な人間であることは、このすつかり駄目な池山を憐れみいとほまれる念佛の恵みを頂いてゐるだけだ」と答へられて静かに念佛されてゐた。今頃になつてしまひと知らされることは、先生が「自分は三文の価値もないすつかり駄目な人間である」と言はれたことの有り難さである。

○ 「ただ念佛して」と教へられる「念佛申さねばならぬ」と律法的にとり「無限の慈悲」と教へられる「このままではよい」と放縱に流れる。我慢を根として久遠の迷ひを続ける我等の姿である。法然上人も「信を強くとけば邪見におち、邪見におとされないで淨土に還り給うた先生こそ、眞に善く如來を説き示して下された方であつた。

佛の一道以外に佛果に到る道はない。その信がないとすれば佛果への唯一つの道が塞されてゐるので最悪である。

我等の常に言ふ善惡と、佛陀の示される善惡はあのづと異なる。我身から言へば惡の至極も佛道から申せば善に転するよき縁であることもあるし、我身によしとして喜ぶことが佛道では大きな障りである場合が往々にしてある。

佛道の善惡の光に照らされるとき、我等の常に思ひ且つ言ふ善惡は全く根なし草で、そらごとたわごとである。

○ 山は山道は昔にかはらねど変りはてたるわがこころかな山伏弁圓の歌と伝へられる。自己の利害のみに執着して、怒りのろひ狂うた弁圓も「左右なく出で立ち給ふ」聖人の慈容に接して、害心の氷がとけて、信心の光が射して、再び世界を見なほした時、天地が一変して整然とした秩序の中に、吹く風も、岸うつ浪も、行く雲も、念佛念佛念佛の諸調自然の樂音が響き、合掌隨喜したことであらう。

○ 「賢に遭へばおのづと寛なり」と聖德太子は憲章に仰せらるれば、念佛させて頂くやうになつて二十四年、始めの頃は、念佛さへあれば、信心一つでと傍若無人の横車をひいて廻つたが、實際問題に直面しては愈々自分の駄目さが暴露するばかりである。それにつけても「ただ念佛して」と御廻向下さることの有り難さである。

七
〔賢に遭へばおのづと寛なり〕

編集後記

御慈悲のきはまりなきことを御信嘗下された聖人の御述懐がこの章であります。

▲「よろこぶ力の無き故にこそ」の松村氏の御原稿は頭でよくわかつて居りながら身になかなかつきかねるところを方説して下されてあります。佛は御慈悲で向うて下さるから、

こちらはよろこばねばならぬといふことが相

対五分五分の心である。向ふが悪くするから

こちらも悪くするといふのと同様である。お

慈悲は有難いといつてゐる心底に斯様な五分

五分のよろこびがひそんでゐる。「よろこばぬにていいよい往生は一定と思ひ給ふべきな

り」との神聖の仰せは、煩惱具足の身として

金輪際よろこぶことの出来ない貧窮の人をこそ

捨てじとの広大な佛意を御知らせ下さるので

ある。この眞言として「おまへして我らはただ「たのもし」と一つである。

佛陀降誕の聖日を迎へた陽春、聖德太子の千三百三十年が磯長の御廟を中心盛大に執行されると聞く。現に人々の心の帰すべき所を知らぬ毘沙門塔時に太子の御名を聞くさへ心温まる思ひである。仰ぎ願はくばこれを機として太子の眞精神が地に潤ふやうに念じてやまない。

朝に深く夢殿にこもられては佛心に心を洗はれ、夕べに再び夢殿に帰られては佛意を謝し給うた太子の四十九年の御生涯は、古今に通じ中外にもとらぬ大遺憾よ。心に頼りとして下さり、今日愈々仰乎として人心の帰心を照し示して下さつてゐる。洪恩実に謝し難いものがある。門外不出の身ながら遙かに西方に向ひ御靈前に礼し奉る。

○

★執筆者御住所★

福島政雄 横須賀市田浦局区内

谷戸六六二

山下成一 愛知縣常滑局区内市場
松村繁雄 山口縣仁保局区内仁保

名古屋市南区駿河町二ノ二八
名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所

本 田 政 雄

発行所

慈 光 社

振替口座番号 名古屋一〇四七〇番

昭和二十六年四月十日 印刷
昭和二十六年四月十五日 発行
毎月一回十五日発行

定価 一部金拾五円(郵税共)
一年分金百八拾四(郵税共)

名古屋市南区駿河町二ノ二八
名古屋市千種区千種町馬走二八

植木家

花 田 正 夫

登録人

花 田 正 夫

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所

千 章 印 刷 所

名古屋市南区駿河町二ノ二八

一道会館

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所

千 章 印 刷 所

名古屋市一〇四七〇番

▲「無碍の一道」の山下先生の御原稿は一道会館開筵の日の御法話の概要であります。煩惱具足の身を持つて火宅無常の世界に住む罪障深く重き身を、照し護り攝めて下さる佛の